

## 運命前定論

### 光源氏須磨流謫と明石一族の運命

有 松 陽 子

ままならぬ流れによって、人生や生活に大きな変化が訪れる時、人は時としてその流れを「運命」と呼ぶ。

吉事であれ、凶事であれ、平穩であるはずだった生活が大きく変わる。あるいは、長い年月の中で、気づかぬうちに、少しずつ押し流されるように、それまでいたところと違う場所にたどり着く。会うはずのない人と会う。大切な人と離れざるを得なくなる。

いずれにせよ、変化せずには生きていけないのが人間であるが、その変化が顕著であったり、あるいは極端に感情をゆさぶるものであった場合、そこになんらかの恣意、あるいはエネルギーのよくなものが働いているのではないか。ふと、そう思うことがある。運命という言葉を使うとき、私たちはその背景に「あらがえないもの」、「変えることがむずかしいこと」としての意味を見る。それは、あるいは諦観であり、あるいは決意であり、あるいは希望であることもある。

菅原孝標女が『更級日記』を一つの作品として書いたのは、晩年、みずからの人生を振り返る時間と精神的余裕ができた頃である。少女の頃の瑞々しい感受性のもとに心に刻み込んだ上洛の旅や、長く親しんできた様々な物語や歌などを心の中で反芻しながら、自らの人生をしたためるにあたって、孝標女は、様々な文章表現の工夫を十分に作品の中に反映した。それらの工夫の中で、特に筆者が注目したのは、彼女の運命に対する受け止め方、考え方であった。

彼女は、運命というものを、それが訪れるより以前、場合によっては遙か前世から定められていたものであると受け止めている。たとえば、姉の死、乳母の死、侍従大納言の死、主人の死などの記述には、月の光、言葉、死を暗示する歌や物語などの徴を点描することによって、死の運命の訪れをひそやかに暗示してある。また、上洛の旅の途中での竹芝伝説、富士川伝説、自分の人生を彩るさまざまな夢告など、運命に関わることには必ず、宿世思想

にせよ神仏の意思にせよ、なんらかの形で運命がおとずれる前にすでに定められていたという思想が現れている。筆者はこの点に注目し、先に『更級日記』における『運命前定』<sup>(注1)</sup>という論を書いた。『更級日記』において、孝標女は半意識的に、運命はあらかじめ定められていたことをさまざまな形で表現することによって、自らの人生を描いた作品に彩りを添えたのである。

このように、孝標女が運命前定の思想を持っていたことは、はたして彼女の独創であったのか。あるいは単にそれまでの平安文学の流れにのっとった思想であったのか。

筆者は拙稿「平安文学における運命観」<sup>(注2)</sup>において、平安時代の物語文学、日記文学、説話集などにおける運命観の受け止めを、それぞれの作品における表現の出現数をもってデータとして論証した。歴史物語を該当として上げていないことや、採取できた数<sup>(注3)</sup>があまりに少なく論ずるにはどうかと思われる作品もあることなどを鑑みると、まだ論としては未成熟な点も多い。本論はその先論をふまえて、あらためて運命前定という点に集中して、特に菅原孝標女が強く影響を受けた『源氏物語』に見られる運命前定の思想について考察していきたい。

先に、運命前定という用語について確認する。筆者が『更級日記』における『運命前定』<sup>(注3)</sup>、「『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』における『運命前定』」<sup>(注3)</sup>などにおいて論じてきた運命前定という

言葉の意味するものは、運命の当事者が自分の運命の到来時やあるいは過去をふりかえって、「この運命は、今突然に訪れたものではなく、はるか以前から定められていたのだ」という感慨を抱くにいたる受け止めである。民俗学においても昔話研究などで運命前定という言葉は使われるが、この場合、本論で考察する運命前定とは若干意味合いが違ってくるので、<sup>(注4)</sup>本論中での運命前定という時、具体的にどのような要素をもって示されるかをあらためてこの場で定めておく。

1、その運命をもたらすものが宿世思想のみではなく神仏の意志なども交錯している、複合的な要素から成り立っている運命観であること。

平安文学における運命観は、主に宿世思想に集中して論じられてきた。「宿世」イコール「運命」と解釈されてきたと言ってもさしつかえないほどに、宿世思想は平安文学における運命思想の代表的な思想である。

これには「運命」という用語が当時一般的に用いらなかったこともあざかっていいる。「運命」の語が日本文学で最初に使われたのは、森田喜郎氏によれば『本朝文粹』<sup>(注5)</sup>からであるという。

『本朝文粹』巻第三、対冊、「論運命」は、藤原博文の問題文に對して大江朝綱が答えた文章である。また、『本朝文粹』巻七「江匡衡 返送貞観政要於藏人頭藤原行成朝臣状一首」と「行成朝臣 同返報状一首」のやりとりの中にも「古人有言、運云命

云、共在于天云々。夫天之運命。非<sub>レ</sub>智非<sub>レ</sub>知」とある。これらの漢文において取り上げられている「運命」という言葉は、中国の天命説を背景としたものであり、個人の運命というよりは、国家を統べる天子の、天から与えられた運であり命であるものを示す場合が多い。山崎誠氏は「王朝においては運命ということがとかく官途に於ける窮達に關してもっとも意識せられたものと察せられる。従って、人間がいかに恣意な運命の翻弄を受けるかというふうの問題に、もっとも思索をよくしたのは官人鴻儒の輩であつたともいえるであろう」と述べた。<sup>(注6)</sup>しかしおそらく、運命という言葉の背景にあるものが天の意によって国を任される天子の氣運を表すものであるならば、その天子の定める王朝の官位に着く人々にとっての運でもあるというところで、個人のプライベートな運命というよりは政治向きの公共的意味合いの大きいものだったと解釈するほうが適切かもしれない。また、森田氏は運命という言葉が用いられなかった理由として、①漢文で伝えられたこと、②その後、貴族社会が長く続き、政権を奪いあい、運命をかけて戦うことのない世襲制の平和な時代が続いたこと、③仏教の影響が強まり、「運命」の意が「宿世」という語に含まれて表現されたこととの3点をあげている。<sup>(注7)</sup>筆者はそれらに加えて、平安文学が主に女性によって生み出されていた点にも注目したい。女性はただでさえ漢文の熟語をさかしらに使うことへの抵抗が大きかった。そのような環境にある彼女たちが、漢文の世界にしか出てこない熟

語を、日常の自分たちの人生を表現する言葉として使用した可能性はかなり低いのではないか。これらの理由によって、その当時存在しながら、そして他では用いられながらも、王朝女流文学には運命という言葉が用いられなかったのだと考えられる。

さて、話を戻すと、運命という言葉自体は存在したものの、それは平安文学において用いられることはほとんどなかった。そのため、先に述べたごとく「運命」イコール「宿世」としてとらえられてきたのであるが、実際の作品には神仏の意思や伝統的な信仰思想が背景にある場合も見過ごせないほどに多い。また同じ仏教思想の因果応報の考え方でも、過去世と現世、現世と来世など、転生を間においた因果の働きと、現在生きている人生の中の現報としての因果応報も、実際には宿世思想と違う受け取り方をされている。<sup>(注8)</sup>

以上をふまえて、本論において運命前定という言葉で運命を論ずる場合は、これらの神仏への帰依、仏教思想、伝統的な民間信仰などを総括したものと規定する。

2、運命の到来以前に、それをあらかじめ示す夢告、予兆、暗示などの徴がみえること。

具体的には、占い師による観相や宿曜などによる占い、「ものさとし」と表現される明瞭ではないながらもならかの要素がうかがえる尋常ではない兆し、人魂が飛ぶなどの予兆、夢告などの兆しが明記されていることは、それが後に運命前定の兆しであつ

たと登場人物が判断するための重要な要素である。『更級日記』では、先に述べたように、侍従大納言女の死に際して「とりべ山」と死を暗示するような和歌を孝標女に残していたり、また、孝標女の姉も「ただいまゆくへなく飛びうせなばいかと思ふべき」(303)と自分が消え失せるようなことを口にしたたり、あるいは「かばねたずぬる宮」という物語を生前に求めていたりといった記述が、彼女たちの死後に書かれているが、こういった要素も徴として受け止めたい。また『源氏物語』でも、浮舟の動向には、薫の「形代」としての捉え方や、匂宮との逢瀬の際の白い衣など、本人、周囲の動静や状況などの中に、後に来る不幸を讀者に予感させる表現が多数出てくる。これらも同じく運命を予告する徴としてとらえる。

3、本人や登場人物が、後に「あのときに運命はすでにさだまっていたのだ」と振り返って感得していること。

これは必ずしも必要な条件ではないが、作中にそのように受け止めているとすれば、作者自身の中に、「登場人物があらかじめ定められた運命の中にあることを自覚する」という意識があるということでもある。『源氏物語』『玉鬘』巻では、右近と玉鬘の再会は長谷寺の観音の効験によって再び出合うことができるという運命が授けられたからこそであるとして受け止めている。ここには右近が長年長谷寺に参じて玉鬘の安否を祈念してきたという、右近から観音への積極的な働きかけがあったということではあるが、同様

に運命を握るものが神仏であり、その神仏に祈念したからこそこの運命がおとずれたのだという受け止めをしている時点で、運命前定と規定する。

以上の3つの観点から、『源氏物語』の軸でもある、光源氏の須磨流謫と明石一族との関わり、その後の光源氏と明石一族との繁栄とを追いながら、運命前定思想の要素を確認し、その在り方などを考察していきたい。

まず、運命の推移と現れた兆し、そして状況におけるそれぞれの受け止めを、それぞれに運命の推移に従って時系列に並べ、どのような兆しがどの運命を示すものであり、それを登場人物がどのように受け止められているか、表にまとめた。

(表1)

1	2	3	4	5	6
<p>運命の推移、事件など</p>	<p>光、藤壺と密通</p>	<p>藤壺、光の子を出産 (後の冷泉帝)</p>	<p>光、朧月夜尚侍との密通の発覚、須磨へ下る</p>		
<p>夢告、運命の徴など</p>	<p>光、夢解きをさせる。「及びなう思しもかけぬ筋のことを合わせけり。『その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる』」 〔若紫〕①233)</p>				
<p>登場人物の受け止め</p>			<p>・藤壺との密通の報いとしての受け止め。光「かく思ひかけぬ罪に当たりへばるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる」〔須磨〕②179)</p>	<p>・前世の罪としての受け止め。光「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる」〔須磨〕②165)</p>	<p>・前世の罪、過去の歴史との比較の上での受け止め。左大臣「まことに犯しあるてにしも、かかる事に当たらずりけり。なおさるべきにて、他の朝廷にもかかるたぐひ多うはべり」〔須磨〕②166)</p>

11	10	9	8	7
<p>紫の上からの使者到来。都の様子を告げる。</p>	<p>その後の暴風雨</p>	<p>三月上巳の祓、暴風雨に襲われる</p>	<p>三月一日、明石の入道の夢</p>	
<p>様々なものさとし。京でも雨風が続く、雷も絶えることなく、激しく雹の降る日もあり、「いとあやしき物のさとし」として仁王会などを行う（「明石」②224）</p>	<p>夢、光、何度も「そのさまとも見えぬ人」の夢を見る（「明石」②223）</p>	<p>夢告、「そのさまとも見えぬ人」が光のもとに現れ、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」と告げる。（「須磨」②219）</p>	<p>夢告、明石の入道、「さまことなる物の告げ」あり。それ以前より「十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひ設けて、かならず雨風止まばこの浦に寄せよ」（「明石」②231）という夢を見ていた。</p>	
		<p>・竜王の使いとしての受け止め。光「さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけり」（「須磨」②219）</p>	<p>・住吉の神の導きとしての受け止め。</p>	<p>・宿世の縁によるとの受け止め。明石の入道「吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり」（「須磨」②210）</p>

18	17	16	15	14	13	12
	明石の上、懐妊。		初夏の夜、明石の入道、光源氏に娘を勧める。	光源氏、明石へ	明石の入道の迎え	嵐が納まる朝、桐壺帝が光の夢に現れる
光源氏、帰郷。					夢告どおりの嵐、舟を導く不思議な風。「舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべりつる」〔明石〕②232)	夢告、桐壺帝「住吉の神の導きたまふままに、はや船出してこの浦を去りね」〔明石〕②228～229)
		・住吉の神の導きとしての受け止め。光「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそは」〔明石〕②246)	・住吉の神の導きとの受け止め。明石の入道「わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにや」〔明石〕②244)	・明石の上との宿縁によるとの受け止め。光「かくおぼへなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら」〔明石〕②237)	・住吉の神の導きとの受け止め。明石の入道「まことに神のしるべ違はずなん」。光「まことの神の助けにもあらむを」。〔明石〕②232)	・自然に犯す罪の報いとしての受け止め。桐壺帝「これはただいささかなる物の報いなり」〔明石〕②229)。

23	22	21	20	18	19
<p>明石の女御、東宮の男皇子を産</p>	<p>明石の女御、東宮へ入内</p>				<p>明石の姫君の誕生</p>
<p>・明石の女御の宿縁によるとの受け止め。明石の尼君「若君のかくひき助けたまへる御宿世のいみじくかなしきこと」〔若菜 上〕④104)</p>	<p>・住吉の神の加護との受け止め。明石の上「まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らるる」〔藤裏葉〕③452)</p>	<p>・明石の姫君が生まれる宿縁あつての運命との受け止め。光「わが御宿世もこの御事につけてぞかたほなりけり」〔濤標〕②294)</p>	<p>・明石の姫君が生まれる宿縁あつての運命との受け止め。光「わが御宿世もこの御事につけてぞかたほなりけり」〔濤標〕②294)</p>	<p>・住吉の神による受け止めと、宿世の縁によるとの受け止め。光「住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて……」〔濤標〕②286)</p>	<p>・宿曜によって先に告げられた運命との受け止め。光「宿曜に『御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし』と勸へ申したりししこと、さしてかなふめり」〔濤標〕②285)</p>



27	26	25	24
<p>明石の入道、山に入る</p>			
<p>明石の上の生まれる年の二月の夜、明石の入道の見た夢。「みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく」〔若菜 上〕④113(114)</p>			
<p>・明石の女御が国母になる宿縁によるとの受け止め、光「横さまにいみじき目を見、漂ひしも、この人ひとりのためにこそありけれ」〔若菜 上〕④128( )</p>	<p>・住吉の神の導きとの受け止め、光「さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり」〔若菜 上〕④128( )</p>	<p>・明石の女御が生まれるに至る宿縁によるとの受け止め、光、「この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかど」〔若菜 上〕④128( )</p>	<p>・明石の入道のもつ、孫が国母となる宿運によるとの受け止め、明石の上「よろずのこと、さるべき人の御ためとこそおぼえはべれ」〔若菜 上〕④120( )</p>

以上、表にまとめた内容を見ながら、特に注意が必要な点を確認していききたい。

表でまとめたとおり、この明石の運命においては、登場人物それぞれに運命の兆しがなんらかの形で現れ、そしてそれぞれが兆しにそって運命を解釈し、受け止めている。それは宿世であることもあり、住吉の神の意思であることもある。また、現世の行いの因果による受け止めもあり、さまざまな要素が絡み合っつて一つの大きな運命を作り上げていることが確認できる。

以下、個別に注目すべき点を確認していく。

4、まず、光自身が須磨に下らざるをえない運命を、父帝の寵愛の女性を奪い子成した過去の密通の罪の因果によるものと受け止めている点に注目したい。これは同じ因果によってもたらされる運命であっても、宿世思想ではなく、現世で自分が犯した罪の果報による現報としての受け止めである。

6、舅である左大臣が、光の須磨下向にあたり、宿世による受け止めと同時に中国の故事などを例にあげ、優れた人はえてして讒言などによって憂き目にあう運命にあると光を慰める。

ここで確認したいのは、左大臣が、世間で表面上注目されている密通の罪あるいは謀反の罪があったとしても、このように蟄居するまでにはあたらぬ罪だと述べている点である。光の周囲の者も「今何の報いにか、こころ横さまなる浪風にはおぼほれたまはむ」、「罪なくて罪に当たり」（「明石」②227）と言ひ、光

自身も上巳の祓の際に「八百よろず神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」（「須磨」②217）と述べている。これは謀反の罪をねつ造されたとの気持ちもさることながら、朧月夜との密通においてもここまで厳しく糾弾されねばならないほどの罪ではないということであろう。にもかかわらずこのような憂き目を見なくてはいけない運命が光にあるのならば、その原因として思い当たるのは現世の行いではなく、決してかえりみることでできない前世の行いにあるはずだと、当時の人々、少なくとも『源氏物語』の登場人物には、おのずからそのように思われているのである。

13、光は、明石の入道の迎えを目前にし、彼の述べる神の導きを聞いた上で、「夢現さまざま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末思しあわせて」（「明石」②232）と、自分の身におこった夢告やさまざまなものさとしを鑑み、また、「夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとをか疑はむ」（「明石」②233）と父帝の霊の夢告と照らし合わせた上で、この迎えを住吉の神の導きと信じ、明石へと向かう。光源氏、明石の入道ともに「そのさまとも見えぬ人」、「さまことなる物」によりさとしがあること、住吉の神の導きとしての夢告があること、光を迎えにいく明石の入道の舟に靈験があったことなど、様々な運命の徴しが光を明石の運命へと導いていくことが確認できる。

15、初夏の夜、明石の入道は光源氏に、光の須磨流謫と娘の運

勢とを重ね合わせて確信をもって述べる。そしてこの夜、明石の上がまだ少女の頃から、自ら思うことがあって長年住吉大社に春秋ごとに参詣してきたこと、毎日の昼夜の勤行をつづけてきたことなども告げる。娘に対する明石の入道の高望みとも言える願いを聞きながら、光は16に見られるように、住吉の神の導きと明石の上との宿縁によって自らの運命が定められていたのだという感慨を抱くにいたる。すでに定まっていた明石の君との宿縁によって、あのような辛い目を見て都を遙か離れ、須磨の浦まで来なければならぬ運命をたどらなければならなかったのだと感得するのである。そして、このようにして運命に導かれて契りを結ぶこととなった明石の君との間に、光の待望の、ただ1人の女君が生まれるのである。

19、いつのことかは作品中に明記していないが、光は宿曜による占いによって自分のこどもに関する占いをさせていたらしく、冷泉帝の即位と明石の姫君の誕生がほぼ同時に実現するにあたって、宿曜の占いによってすでに予言されていた運命が実現していくことを実感する。

20、ここでは住吉の神の導きによって成された明石の上との出会いと、光の子を産むほどの宿運のあった明石の君の運命が並列している。子をなすにいたるのは神の靈験によるのではなく個人の宿運であり、しかしその宿運を助けるために神が導いたとして、それらの複合的要素が混在しながらもそれぞれの運命に対する別

の働きかけがあることが確認できる。

24〜27、ここにおいて、光源氏の須磨流謫と明石の上との宿縁、および二人の子である明石の姫君が入内し、後に国母となる。そしてこの一連の運命の大きな流れが、さかのぼれば、明石の上が生まれた年に見た明石の入道の瑞夢から始まった運命であったことが、読者にも登場人物達にも初めて確認される。明石の入道、明石の上、明石の女御一人一人の持った宿縁に導かれ、支えられて、光源氏は憂き目を見ながらも都に返り咲き、世に最高の栄華を誇ることとなるのである。特に注目したいのは、作者紫式部が、ただ単に個人の宿縁でも住吉の神の導きだけでなく、神仏その他さまざまな要素を包含しながら、この運命を作りあげているという点である。これは彼女の構造的破綻や、思想に対する曖昧さではなく、それぞれの要素が必要不可欠だからこそ用意されたものであり、また登場人物達にもそのように感得されるべく構成されているものである。

このように、先に述べた運命前定の3つの要点である、「その運命をもたらすものが宿世思想のみではなく神仏の意志なども交錯している、複合的な要素から成り立っている運命観であること」、「運命の到来以前に、それをあらかじめ示す夢告、予兆、暗示などの徴がみえること」、「本人や登場人物が、後に、あのとときに運命はすでにさだまっていたのだと振り返って感得していること」

をそれぞれに兼ね備えた明石の運命は、まさしく運命前定の物語として書かれたと言えよう。読者にも、多くの巻を読み続けてきて明石の入道の入山の記述にいたった時、はるかに初期の「若紫」巻の頃から光源氏の運命が定められていたのだという、壮大な運命の構造への感慨を抱かせる。まさしく紫式部自身が明石の運命を『源氏物語』の主軸をなすもっとも重要な運命前定の物語として描いたと、筆者は考えるのである。

平安文学には、たとえば『夜の寝覚』における天女の予言や、『浜松中納言物語』における数々の夢告などにも見られるような、予定調和としての運命前定の仕組も確かに存在するが、ここまで複雑に様々な要素を絡め、光が須磨に下るよりはるか前に運命の兆しを用意しながら、最後の最後にやっと、そのよって立つ最初の夢告を明らかにしたという複雑かつ精緻な構成をもった作品は、『源氏物語』以外にはないといってもよい。これは、紫式部が、『源氏物語』の大きな流れとなる数奇な運命を、「定められていた運命」として意識して描いたものであり、また、登場人物にも「はるか昔にすでに定められていた運命だったのだ」との感慨を持たせることによって、物語の世界の運命の数奇さ、そして、運命の翻弄されていく光をはじめとする人々の、人生のままならなさとしき様を印象づけるための、作品の主題の重要な表現方法の一つであったのだろう。

こうして、光源氏の須磨流謫と明石の一族の運命に関して運命

運命前定論 光源氏須磨流謫と明石一族の運命

前定の思想があることを確認したが、ここで振り返って、あらためて、今まで明石一族に関する運命について、源氏物語研究ではどのように受け止められてきたかを確認したい。

光源氏の須磨流謫と明石一族によってもたらされた栄華は、すでにさまざまな視点から論じられている。

光源氏が無実の罪によって須磨へと流れ、後に都に返り咲くという展開は、貴種流離譚とそこから発展した継子いじめの話型として、その悲運の流謫と後の栄華を約束されるとする見方はすでに一つの確固とした受け止めとして定着している。それを背景に、民俗学の視点から、林田考和氏は須磨での嵐を光源氏が罪穢を払拭するための「神意による襖ぎ被へ」として受け止めた。<sup>(注10)</sup> 豊島秀範氏は、貴種流離譚を乗り越えるものとして、『日本書紀』、『古事記』などの記述をあたり、住吉大社の祭神の石柱である神功皇后の伝承と光源氏を重ね合わせ、住吉の神の威徳とそれを祭る海人部たちの重要な根拠地であった明石の地のもつ意味を説き、住吉の神の意をもって光の運命が開けたことを論証した。<sup>(注11)</sup> 藤井貞和は、須磨を畿内、明石を畿外ととらえ、光が明石に移ることによって王権の外に出ることにより、外来王として都へと戻り潜在的王権を担うことになるという、明石という土地の意味合いをくみ取り、<sup>(注12)</sup> 東原伸明はそれを受けて、さらに『竹取物語』、『平家物語』、『栄花物語』などから明石の地と海龍王のつながりを示し、「〈明石〉は〈外部〉を指標し、〈外部〉であることによつて正統

的な支配を形成確立する力―権力を、つねに有している」として、光が明石一族との縁によって正統的な支配権力を得たことを論じた。<sup>(注12)</sup>

一方で仲田庸幸は明石の上に注目し、彼女の「光源氏の開運と相即不離に描かれる」ものとして、「明石の上の物語は、宿世もさることながら、彼女の父明石入道の彼女を中心とする夢と信仰とが、核となり推進力となっている」と述べ、また、明石の上が「幸人」となったのは、「彼女の理想と個性とを修行・反省・謙抑によって高めていった点に負うことも極めて大であった」として、自らの資質と努力をもって自分の運を開き、かつ「光源氏を裏側から救う一役を果たすことになった」とした。<sup>(注13)</sup>

これらの先行文献が多くの事実を述べる中で、あえて筆者が運命前定論を唱えるのは、この光源氏と明石一族の隆盛を築き上げる明石の運命が、先に確認してきたとおり宿世思想だけでは論ずることができず、また同様に住吉信仰などによる神仏への信仰だけでも、あるいは夢告や予言などの問題だけでも語ることはできないほど複雑にそして不分離に絡み合っている点にある。紫式部は、この明石の運命の構造上での運命を作り上げる要素を、単に宿世思想や住吉信仰だけではなく、光源氏が栄光の階段を上っていく様、そしてそれらを助けるために用意された明石一族も栄華を極めていく様を描く上で、それぞれがもっとも効果的な形で配置され、他に置きかえることのできないような仕組みに描いてい

る。たとえば、光が須磨から明石に移るためには、その直前の明石の入道が見た住吉の神の夢告と嵐の翌日の舟の導きという住吉の神の靈験、そしてそれを神の意志と信じる住吉の神への信仰がなくてはならず、その前に光がみた「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」(「須磨」②219頁)という異形のものも夢告も、光を住吉の神の導きによって明石に誘うだけではなく、もし意に叶うものが現れなければ海に身を投げるよう言われた「海龍王の供儀」としての運命も合わせ持った明石の上の特質を暗示するためにおいても効果的に配置されたものである。また、父帝の靈による夢告も、その後の京での兄弟朱雀帝におとずれた夢告や異変などから光を再び呼び寄せるために必要な場所に配置されている。これら複合的な運命の要素が密接不離に入り組んで、それぞれに効果を発揮しているからこそ、帰京後の光の栄華が約束されるのである。

また、明石の運命に深く関わった光源氏、明石の入道、明石の上、明石の尼君それぞれが、折に触れ自らの運命はのちに光源氏と明石一族の血統から国母を生み出すために用意されていたものであったとの感慨を受け止めていることにももう一度注目したい。この、「運命があらかじめ定まっていたのだ」という感慨は、冒頭に述べたごとく、作者自身の中に、「登場人物があらかじめ定められた運命の中にあることを自覚する」という意識がなければ描かれることのない表現であり、それを運命に関わる重要人物達

が繰り返し述懐しているということの意義を受け止めたいのである。

紫式部にとって、この明石の運命は、自らが綿密に構想した運命の展開図ではありながらも、その図の中に描かれた主要人物達が自覚無しに運命に操られるままにするのではなく、彼らが運命を自覚すること、その中で生かされている自分であることを描くことによって、自らも運命という大いなる意思によって生かされているという一つの思想を描き出したと言えるのではないだろうか。

運命はあらかじめ定められている。これは物語の予定調和の中でこそ受け止められる、一つの大団円のための重要な構成要素ではあるが、同時に、宿世思想や神仏への帰依などに心を寄せながら、それでもなお先のわからない人生を生きる人々の不安と人生への期待、絶望などをより自分の納得のいく形で受け止めるための一つの思想として、紫式部の中に受け止められていたと筆者は考える。それは紫式部のみ独創というよりも、末法思想の高まる時代の気運と、それ以前から綿々と続けられてきた日本人の伝統的な思想であると考える方がより自然であろうが、このことについては、いずれ別の場で論じて行きたい。

そしてまた、『源氏物語』全編を通して見るとき、作品中に現れる運命前定の思想は、今回述べることのなかった他のさまざま

な要素も含んでおり、これもまた次回以降の論で、他の平安文学作品とも比較しながら検証し、さらに運命前定の思想への考察を深めていきたい。

※本文引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』①④（新編日本古典文学全集 小学館）、犬養廉校注・訳『更級日記』（新編日本古典文学全集 小学館）、木曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粹』（新日本古典文学大系 平成四年五月 岩波書店）、による。それぞれに文章の後ろに（ ）内に頁数を附した。

注

- (1) 有松陽子 「『更級日記』における「運命前定」」 『新樹』第十二輯 平成九年十月 梅光女学院大学院文学研究科日本文学専攻
- (2) 有松陽子 「平安文学における運命観」 国立歴史民俗博物館研究報告 第91集 「〇〇国際シンポジウム ポスターセッション」 生・老・死…日本人の人生観 内からの眼、外からの眼 新谷尚紀編 平成十三年三月 国立歴史民俗博物館
- (3) 有松陽子 「『浜松中納言物語』・『夜の寝覚』における「運命前定」」 『新樹』第十四輯 平成十二年一月 梅光学院大学院文学研究科日本文学専攻
- (4) 民俗学の中の昔話研究における運命前定は、「子供の誕生の際

に三柱の産神があらわれ、その子供の死の原因と、時、婚姻、貧富、禍福などの生涯を予言する。当事者がこれを回避しようとしてあらゆる方法を講じてもいづれも失敗に帰し、神々の予言は必ず実現するものであるということを主題とした一連の物語」(関敬吾「運命譚―その系統と分布―」『成城学院大学民俗学研究所紀要』6号 昭和五十七年三月 成城学院大学民俗学研究所)である。

(5) 森田喜郎 『日本文学における運命の展開』 平成八年五月 親典社

(6) 山崎誠 「王朝官人の運命観 ―『本朝文粹』を中心に―」『広島女子大学文学部紀要』第十一号 昭和五十一年三月 広島女子大学

(7) (5) に同じ

(8) 善因善果、悪因悪果という点で原理としては同じだとしても、過去世に因をおく宿世思想の場合は、その因については推し量る方法もなく、ただ過去に因があるのではないかと推量するのみである。一方で、現世に因をおく現報の考え方は、自分自身の生きてきた人生に因があるとするので、本人あるいは周囲のものが、その因を自覚している場合が多い。また、当時の人も、過去因と現世因の違いを認識していたことは、須磨において嵐にあった光源氏の供人の言葉に、「罪なくて罪に当たり、官位をとられ、家を離れ、境を去りて、明け暮れやすき空なく嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなんとするは、前の世の報いか、この世の犯しかと、神仏明らかにましますば、この愁へやすめたまへ」

と祈ることからも確認できる。

(9) 林田孝和 「須磨のあらし」 『源氏物語の発想』 昭和五十五年三月 桜楓社

(10) 豊島秀範 「須磨・明石の巻における信仰と文学の基層 ―『住吉大社神代記』をめぐる―」 『源氏物語の探求 第十二輯』 源氏物語探求会編 昭和六十二年七月 風間書房

(11) 藤井貞和 「うたの挫折―明石の君試論―」 『源氏物語及び以後の物語・研究と資料』 古代文学論叢第七輯 紫式部学会編 昭和五十四年十二月 武蔵野書院

(12) 東原伸明 「源氏物語と〈明石〉の力―外部・龍宮・六条院―」 『物語研究第二集』 物語研究会編 昭和六十三年八月 新時代社

(13) 仲田庸幸 「明石の上の運命と文芸美」 昭和五十一年五月 『源氏物語の探求 第二輯』 源氏物語研究会 風間書房